

総評

片山和俊 | 審査委員長、東京藝術大学名誉教授



表彰式

難しい審査であった。

今回を野球の甲子園に例えると、絶対的なエースや長打力のあるチームではなく、単打をつなぎ勝ちにつなげるようなチーム間の戦いで、予想をつけにくい状態にあった。これまでに見られた地方別の優劣差も少なく、押し並べて全国が一律な状態にあるように思われた。全体にレベルが上がった証と言えなくもないが、空き家問題が、ある特定地域を超えた広がりをもち、空き家を活かそうとすると同じような発想と解決策になると類推できるだろう。

各作品の差が見えない分、審査の出足は迷走気味であった。が、シード校の選定を経て1対1の戦いを繰り返すうちに、各作品の内容や特徴が浮かび上がり、ベスト8の戦いを迎えた段階では、審査員の評価がしばしば割れての白熱戦となった。

その中から優勝校「夢を描きながら住まうこと ～地域を創るわかもん団地～」(富山工業高等学校)と準優勝校「空き家の価値よ、永遠に ～時代に寄り添う空き家のカタチ～」(舞鶴工業高等専門学校)が生まれた。正確に言えば、各回の戦いに負けずに残ったという感じだ。この2つの作品は、サブテーマ「空き家を活かす」の典型的な回答であるように思われる。優勝作品はSNSなど今はやりのネットによる「絆」を媒介にした空き家解消方法であり、片や準優勝作品は空き家が増える趨勢を認め、プロセスに手を貸しながら緑に任せる方法である。前者がよく事件として報道されるような危険性を孕み、後者には減築や緑の管理の難しさなどの問題が予想されるが、ともによく考えられた優れた提案であることに間違いない。

2作品はどちらかというと特定な地域との関係よりも、空き家を活かすほうに重心があったが、「地域のくらし」と「空き家」両方に応えようとした作品がなかったわけではない。審査過程を振り返ると、残念ながらそういう作品はベスト8までに姿を消していた。「KURA HOUSE」(郡山北工)、「移職住」(石川工専)、「東新町でokemon GO」(徳島科学技術)、「唐津に生きる」(唐津工)などだが、野球で言えば有効打がもう1本出れば局面が変わったかも知れない。チョット惜しい。

終盤の白熱戦の審査を続けながら、その一方で頭をよぎったのは「空き家を活かす」というサブテーマの再考である。空き家問題には、すでに特定地域で解決できる範囲を超えているという現実がある。その状況の中で、地域と空き家両方をバランスよく捉えることを、高校生諸君に委ね続けるのは酷かも知れない。今回の審査は、来年度に向けての課題が浮上した場と時間でもあった。

今回の審査は、各委員の意見や判断が分かれることが多く、そのやり取りの中から作品の内容や特徴を捉えることができた。その過程を賞に反映させることとし、まちづくり委員長特別賞、女性委員長特別賞と青年委員長特別賞を贈ることとした。逆に例年の教育・事業本委員長特別賞は委員長の判断により、今年は見送りとなった。最後に審査委員長特別賞は『月』を継承『月』の文化ふたたび(天竜高等学校)とした。「空き家を活かす」を問題として解かず、月夜という時間と空間に生かした点に惹かれた。特別賞に相応しい作品と思われるが、どうだろうか。